

# 日蓮聖人の災害記録

——平成二十三年三月十一日 東日本大震災起こる——

## 三 谷 祥 禰

東日本大震災で犠牲となられた方々へのご供養と被害を蒙られた方々へのご救済に奮闘されておられる皆様、誠に苦勞様でございます。このたびの天変地異を眼前にして、人類の文明も努力も進歩も自然の力にはひとたまりもなく一瞬にして壊されていくという恐怖を嫌というほど思い知らされました。失われた尊いお命の無念さを万感の思いで涙しております。ご当地に暮らしてみえた人々のご家族と紡ぎ合うささやかな暮らしを偲ばせていただきました。

三月十一日、地震津波の後に起った福島原子力発電所の事故は底知れない恐怖と苦悩を撒き散らしています。天災と人災の二重災害を受け止め国難を克服し不安のない日々を構築する為には、宗教者が世の是正を正し積極的に諫暁していく情熱にかかっているのではないのでしょうか。レジュメに基づきまして、日蓮聖人の災害記録と東日本大震災が及ぼした原発事故についての私の思いをお話させていただきます。

昨年、二十二年発表の研究資料は、宗祖の御遺文から国家諫暁までの災難に関する二十五の語彙を上げ、その語彙が著述された年代順に表しました。本年は、三月に勃発した大震災に関連しまして、日蓮聖人がご活躍された当時起った大震災、大波、大風、津波にしほり、その語彙に関する御遺文を年代順に掲載しました。私手作りの研究資料『鎌倉災害史』は、源頼朝が安房国へ上陸から、日蓮聖人御入滅までの一〇二年間の天変地異史です。当然、宗祖の御生涯に亘る気候変動が一目できます。参考文献、引用資料は巻末に記載しました。地震、飢餓、天候不順による災

難は日蓮聖人が立正安国論を御撰述された国家諫暁の期間までを昨年の研究資料にまとめています。『現代宗教研究』誌へ一〇二年間の寄稿は多くの頁を割きますので資料は当日の配布分とさせていただきます。

大地震は御遺文に三十六ほどの語彙が見えますが、その中の三十の語彙が、現実の大地震をさしています。鎌倉幕府の『吾妻鏡』にも宗祖ご体験の震災時の様子が生々しく記されています。

正嘉の大地震 一二五七年八月二十三日 乙巳 晴 聖壽 三十六歳 鎌倉在住

戊の刻大地震。音有り。神社仏閣一字として全きこと無し。山岳頽崩し、人屋顛倒す。築地皆悉く破損し、所々の地裂け水湧き出る。中下馬橋の辺地裂け破れ、その中より 火炎燃え出る。色青しと。『吾妻鏡』

大天変大地天の語彙を著された御遺文

『神国王御書』 文永十二年 五十四歳 身延

天変地天の語彙を著された御遺文

『妙法比丘尼御返事』 弘安五年（一二七八年） 五十七歳 身延

「天変と申て彗星長く東西に渡り、地天と申て大地をくつがえすこと大海の船を大風の時大波のくつがへすに似たり。大風吹て草木をからし、飢餓も年々にゆき、疫病月々におこり、大早魘ゆきて河池田畠皆かはきぬ。如此三災七難数十年起て民半分減じ。残は或は父母、或は兄弟、或は妻子にわかれて歎く声秋の虫にことならず。」

## 一 日蓮聖人の御遺文に見える現実の災害記録

大地震

『災難対治鈔』

正元二年（二一六〇年） 三十九歳

- 1 「国土起大地震」
- 2 「建長八年八月至正元二年二月大地震・非時大風・大飢饉・大疫病等種種災難連連于今不絶」  
『安国論副状』 文永五年（一二六八年） 四十七歳
- 3 「正嘉元年〔太歳丁巳〕八月二十三日戌亥剋大地震」  
『安国論御勘由來』 文永五年 四十七歳
- 4 「正嘉大地震」  
『宿屋入道許御状』 文永五年 四十七歳
- 5 「正嘉元年〔丁巳〕八月二十三日戌亥刻大地震」  
『与北條弥源太書』 文永五年 四十七歳
- 6 「去正嘉元年丁巳八月二十三日戌亥刻大地震」  
『安国論奥書』 文永六年（一二六九年） 四十八歳
- 7 「正嘉元年〔太歳丁巳〕八月二十三日戌亥之剋大地震」  
『富木入道殿御返事』 文永八年（一二七一年） 五十歳 佐渡 塚原
- 8 「正嘉之大地震」  
『顯仏未來記』 文永十年（一二七三年） 五十二歳 佐渡 一谷
- 9 「正嘉年中至今 或大地震或大天変」  
『呵責謗法減罪鈔』 文永十年 五十二歳 佐渡 一谷
- 10 「正嘉元年太歳丁巳八月二十三日戌亥の刻の大地震」
- 11 「正嘉の大地震」

- 12 『法華取要鈔』 文永十一年 五十三歳 身延  
 「正嘉年中大地震」
- 『顯立正意抄』 文永十一年 五十三歳 身延
- 13 「去正嘉元年太歳丁巳八月二十三日見大地震」  
 『聖人知三世事』 文永十一年 五十三歳 身延
- 14 「正嘉大地震」  
 『瑞相御書』 文永十二年 五十四歳 身延
- 15 「正嘉文永の大地震・大天変」  
 『法蓮鈔』 建治元年（一二七五年） 五十四歳 身延
- 16 「正嘉の大地震」  
 『種種御振舞御書』 建治元年 五十四歳 身延
- 17 「正嘉の大地震」  
 『撰時抄』 建治元年 五十四歳 身延
- 18 「正嘉の大地震」
- 19 「今の大地震」  
 『強仁状御返事』 建治元年 五十四歳 身延
- 20 「正嘉・文永二ヶ年大地震大長屋」  
 『智慧亡国御書』 建治元年 五十四歳 身延
- 21 「正嘉の大地震」

- 『清澄寺大衆中』 建治二年 五十五歳 身延
- 22 「正嘉・文永の大地震大長星」  
『清澄寺大衆中』 建治三年 五十六歳 身延
- 23 「正嘉文永の大地震大長星を見て勘云、我朝に二の大難あるべし、所謂自界叛逆難・他国侵逼難也」  
『下山御消息』
- 24 「先大地震に付て去正嘉元年に書を一卷注たりしを、故最明寺の入道殿に奉る」  
『中興入道御消息』 弘安二年（一二七九年） 五十八歳 身延
- 25 「去正嘉年中の大地震」  
『秋元御書』 弘安三年 五十九歳 身延
- 26 「正嘉の大地震」  
『曾谷二郎入道殿御報』 弘安四年 六十歳 身延
- 27 「去正嘉・文永等大地震・大彗星」  
『断』 一一七
- 28 「去正嘉元年 丁巳 大地震」  
『断』 一五四
- 29 「正嘉大地震」  
『断』 一八四 文永十二年（一二七五年）
- 30 「去正嘉元年八月の大地震」

## 大風

『安国論御勘由來』 文永五年（一二六八年） 四十七歳

「正嘉元年〔太歳丁巳〕八月二十三日戌亥時超於前代大地震。同二年〔戊午〕八月一日大風。同三年〔己未〕大飢饉。正元元年〔己未〕大疫病。」

『安国論御勘由來』 文永五年 四十七歳

「正嘉大地震・同大風・同飢饉・正元々年大疫等」

『兄弟鈔』 文永十二年（一二七五年） 五十四歳 身延

「文永九年二月の十一日にさかんなりし花の大風にをるがごとく、清絹の大火にやかるがごとくなりしに、世をいとう人のいかでかなかるらん。」

『報恩抄』 建治二年（一二七六年） 五十五歳

「去文永十一年四月十二日の大風」

『報恩抄』 建治二年（一二七六年） 五十五歳

「去文永九年二月のどし（同十）いくさ、同十一年の四月の大風、同十月に大蒙古の来し」

『上野殿御返事』 建治三年（一二七七年） 五十六歳 身延

「大風の大海の波をたつる」

『上野殿御返事』 弘安元年 五十七歳 身延

「八月、九月の大雨大風に日本一同に不熟、ゆきてのこれる万民冬をすごしがたし。去寛喜・正嘉にもこえ、来らん三災にもおとらざるか。」

『大風御書』 弘安四年 六十歳 身延

「又去文永十一年四月十二日の大風と、此四月二十八日のよの大風と勝劣いかん。いかんが聞候といすぎ申せ給候へ」

『八幡宮造営事』 弘安四年（二二八一年） 六十歳 身延

「文永十一年四月十二日大風ふきて、」

津波

『下山御消息』 建治三年（一二七七年） 五十六歳 身延

「地震は四海を動す。」

『兵衛志殿御返事』 建治三年（一二七七年） 五十六歳 身延

「天もその国をすつれば、三災七難乃至一二三四五六七の日いで、草木かれうせ、小大河もつ（尽）き、大地はすみ（炭）のごとくをこり、大海はあぶらのごとくになり、けつくは無間地獄より炎いで、上梵天まで火炎充滿すべし。これていの事いんどて、やうやく世間はをと（衰）へ候なり。」

『日眼女釈迦仏養事』 弘安二年（一二七九年） 五十六歳 身延

「大地うごけば大海さはがし。」

『鎌倉ご遊字中・宗祖二十歳』 一二四一年四月三日 辛酉

戊の刻大地震。南風。由比浦の大鳥居内拝殿潮に引かれ流失。着岸の船十余艘破損す。『吾妻鏡』

『日本被害津波総覧（東京大学出版会）』によりますと、一二四一年五月二十二日 二十時～二十二時・仁治二年四月三日 マグニチュード七クラス（鎌倉・宗祖三十六歳） 一二五七年十月九日・正嘉元年八月二十三日 波源（震源） 一三九、五度（E）三五、二度（N） マグニチュード 七、〇～七、五と記載されています。

日蓮聖人が体験、見聞された災害記録は膨大ですから、『昭和定本』などで確認されることをお勧めします。この

紙面に取り上げさせていただきましたのは御遺文の一部です。

日本では、毎年起る台風の被害、土砂崩れ、土石流の恐怖、平成七年一月十七日の阪神淡路大震災、特に今年、平成二十三年は東北の沖合に勃発した東日本大震災、地震、津波の窮状があります。和歌山県では、津波を知らせて村を救った「稲村の火」の教訓が知られています。平成二十三年三月二十二日 気仙沼市立階上（はしかみ）中学校の卒業生・梶原裕太さんが、地震津波の被害に対して「天を恨まず、運命に耐え、助け合って生きていく」という使命感を述べ、全国に感動を与えました。

宗祖は、私達同等の悲しみや苦しみを体験され天変地異の恐怖を知っておられるのです。打ち続く法難と天変地異の世に生きておられたのです。このことは非常に大切なことであります。ご信者様、ご縁ある皆様は『日蓮聖人の災害記録』をお話なさいます、精神的な支えになればと思います。

## 二 福島原子力発電所の事故で放射能が拡散している現在

一九四二年十二月五日、アメリカのシカゴで人類史上始めての原子炉が稼働しプルトニウムを生み出しました。やがてそれは長崎に落とされ、約十五万人の市民が亡くなりました。それと同じ種類のプルトニウムが原子力発電所を稼働させるために生み出されています。広島に炸裂した原子爆弾はプルトニウムを生み出すためのウランを原料としていました。軍事兵器のためには核であり、発電のためには原子力という言葉を使い分けていますが、どちらも同じ物質であり、稼働させれば膨大な放射能を発生させます。原子力発電所は電気を作るところです。オーストラリアやカナダの鉱山から採掘されたウラン235をよく燃えるように濃縮します。原子力発電所の原子炉の中で、中性子を濃縮ウラン235に当て核分裂反応を安定的に起こさせます。（臨界）。その時に発生する膨大な熱でお湯を沸かし蒸気を発生させタービンを廻し、発電し送電しています。同時に放射能も発生しています。核分裂時に高温になるタ



ーピンの熱は復水器で冷やされ、七度ほどの温水となり、含まれる放射能と共にその温水は発電所近くの川や海へ捨てられています。生態系に悪い影響を与えつづけています。温度を七度上げた風呂には入れません。原子力発電所は放射能生産と温排水の投棄がなければ成り立たない事業なのです。広島や長崎に投下された放射能よりもはるかに多い桁違いの大量の放射能を生み続け電気を作るのです。

平和利用という名目でスタートした原子力は、地球の生命を絶滅させる代物であることがはつきりしています。拡散した放射能の体外被曝、体内被曝により、治癒不可能な異常が発見され続けています。原子力発電所の環境や事故は放射能の拡散を招き、一番残酷な仕打ちを人類に与え、歯止め効かない地獄を連鎖し続けます。

放射能は姿無く形無く五感で感知できない不気味なものです。得体の知れない存在は線量計による警告音の数値で認識されます。線量計・ガイガーカウンターがなければ平穏な日常であると錯覚させる代物ですが、戦争や天変地異よりも広大な地球規模の土地と永遠の時間を汚染し続けるものです。いのち、水、食料、海も汚染、染色体異常、DNAを損傷させます。人間の形体、行動、頭脳、叡知を損壊させ、精子、卵子に異常を起こさせます。地球上が放射能で汚染されたら得体の知れない生き物世界になり、やがてすべての生き物が絶滅し、死の星になってしまう。

地震の被害も少なく、津波の被害は全くなかった東北の美しい村、原発から四十キロ離れている避難場所であった福島県相馬郡飯館村に放射能が降り注ぎ、非難を余儀なくされました。十一月の初旬、その村の酪農家と名刺交換をしました。受け取った一枚の名刺には、旧住所と新住所が並んでいました。旧住所は福島県相馬郡飯館村……新住所は心急仮設住宅〇―〇―〇と表記されていました。私は、このような悲しい名刺を初めて見ました。その酪農家は「家の近くを線量計で測ると、一〇〇マイクロシーベルトを超えて針が振り切れていた。行政は住民に高い線量を知らせるなど口止めした。専門家を呼び『安全だ』と言い続けるばかりで住民を避難させなかった」と苦悩を吐露されておられました。放射能汚染の影響で、親は子供の安全を考えて疎開させ、自らは近隣に留まって仕事をするという

家族ばらばらの生活が始まり、家畜は置き去りにせざるを得ず、餓死、または屠殺されました。水があっても飲めない、食べ物があっても食べられない、家があっても住めない、あげくの果ては、外へ出るな、空気を吸うな、これでは生きていけません。

原発が稼働するたびに生産される放射能には数百種の化学物質が含まれています。その中で最もやっかいな猛毒プルトニウムは数万年という果てしない殺傷能力を持っています。

日本の原発は、ほとんどが老朽化しています。事故もたくさん起こりました。原子力発電所の建設には数百億から数千億円の建設費、ウラン買い付け費、濃縮、運搬費などがかかっています。ウランを採掘する労働者の被爆、発電所で働く作業員も被爆します。廃炉にするための取り壊しに建設よりも上回る膨大な経費と歳月がかかり、放射能産業廃棄物の莫大な処理費、などを合わせますと建設費の何倍もの莫大な経費がかかります。今年の福島原発の事故は、汚染された野菜等の買取りなどに、ひとまず七百億、汚染地域の除染に二千億と予測。平成二十三年十一月の時点では汚染された土地の買い上げが未定ですから、さらに電力生産コストがかかってくる予定です。

繰り返しますが、稼働する原発内ではCO<sub>2</sub>よりもはるかに恐ろしい猛毒な放射能・核のゴミが生まれています。核のゴミは子々孫々に亘り迷惑と不安をかけ続けていく負の遺産と言われるものです。地震大国日本に不慮の原子力発電所は都会から離して建設されています。タービンを冷やした温水は海洋投棄するための立地条件で決定されています。原子炉に出来る核のゴミ・放射性廃棄物（放射能）は、処分先が決まらず、人類に害を与えない永久的安全な処分方法が考案されていません。青森県の六ヶ所村は核のゴミの中からウランを取り出し、再生させるための施設です。日本は放射性廃棄物（放射能・核のゴミ）にお金をつけて外国へ渡しています。困るものにお金をつけて外国へ輸送することは、その国の住民被爆につながります。核のゴミの輸出は現地でも問題視され反対運動が起きています。

湾岸戦争（一九九〇年～一九九一年）やイラク戦争（二〇〇三年～二〇一〇年）で使われた劣化ウラン弾の放射能

汚染が現在も深刻な影響を与えています。イラクのファルージャでは先天性異常の赤ちゃん、重度の出生異常、白血病の子たち、癌患者が多くいます。核兵器の影響で生まれた何千人もの子供達が重い障害を負っています。病院当局は子供を産まないようにと警告していると言われています。

一九八六年四月二十六日、ソビエト連邦・現ウクライナのチェルノブイリ原子力発電所四号炉で炉心が溶融（メルトダウン）して爆発、広島原発の五〇〇倍といわれる放射性核降下物が降りそそぎました。当時、日本政府は、「日本の原子炉はアメリカ型で、ソビエトとは構造が異なるため同様の事故は起きない」という説明を発表しましたが、福島で事故が起きてしまいました。使用済み核燃料から放出される放射線・エネルギーが元の核燃料が放つ放射線程度になるまでは数十万年ぐらいかかると言われています。これは永遠に「消すことができない」の同義語です。人間の能力で制御できないものを相手にしてはいけません。放射性産業廃棄物（死の灰）の永久管理と恐怖を、私達の子供や未来の人々に残していくわけにはいきません。

昭和四十四年（一九六九年）八月二十一日と二十二日の二日間、日蓮宗の総本山久遠寺で、第一回世界連邦平和促進宗教者大会が開催されました。第八十六世法主一乘院日静上人（九十一歳）が大会会長となられて、「核兵器の脅威によって人類共滅のおそれさえあるのを思うにつけ宗教者は宗教の垣をこえて結集し、人類が生きるための大道を開かねばならない……。」と核廃絶と世界平和の御詞を宣言されました。

核は国を護るための抑止力になるから、日本は核を持つば、外国と対等に亘り合えるという発言を聞くことがあります。核は人間を護ってはくれません。見せかけの防御はエスカレートします。人間の際限なき欲望と忘却が理性と倫理を超えて行きます。一旦動き出した核は止められません。手がつけられず、暴走するのみです。しかも、永久的に人類殺傷の効力を発揮し続けるのです。核は核を阻止することが出来ません。何が命を護るのかといえ、太陽、風、水、天地の恵み、豊饒なる海の幸、人のこころです。この大宇宙の片隅でひそかに輝き続け、人間を育てた地球

を破滅させる行為から手を引かなければなりません。宗教者の倫理といたしまして、放射能を生み出し、環境を猛毒に汚染する原子力発電所の操業は日蓮宗が掲げる「いのちに合掌」のテーマに反しています。仏教の教えに反していません。私達が出来た大切なことは、原発に依存しないエネルギーを大切に扱い使うことです。

正嘉元年の秋から七五四年目の今日、私は次のように詠みました。

徒弟来りて嘆いて曰く、近年より今日に至るまで、天変地異・戦乱・貧困・飢餓・公害・放射能、遍く天下に満ち、広く地上に迸る。牛馬・車両・家屋・土砂に埋もれ、海に流れ、帰らず。死を招くの輩、すでに幾千万を超え、これを悲しまざるの族、あえて一人もなし。

三谷祥禰

二〇一一年十一月九日

於 日蓮宗宗務院